

備陽史探訪

第61号
発行
備陽史探訪の会
福山市多治米町5-19-8
TEL(0849)53-6157

検地帳にみる

近世農村の実態 Ⅱ

―備後国神石郡安田村の場合―

出内 博都

中世の莊園や、国衙領としての郷村制にみられる巨大な生産体としての村。然かも上は本家職・領家職から、下は作人職まで権利が錯綜して、百姓とは名ばかりで、国人・土豪・地持・名主など各種の権力が覇を競う時代から、せいぜい田畑で一町足らずの耕地を直接耕作するいわゆる「一地一作人」主義の小百姓村が出来る上がるのが、一七世紀後半の寛文期頃ではないだろうか。

元禄一三年の水野藩断絶後の検地帳には、実にささやかな村のたたずまいがしのばれる。

中世的権力がたおれ、経済の高度成長による階層分化も未発達な時代相を示している。九五戸の屋敷の坪数を見ると、

- 二〇坪代以下…四三(四五・二%)
- 四〇坪代以下…三七(三八・九%)

五〇坪以上…一五(一五・八%)

現在の建て売り住宅からみると、四〇坪など、普通だと思えるだろうが、平均家族数一〇名(「広島県史」)、その上、居住空間と作業空間の分離は今日ほどではないにしても、考えねばならないだろう。

一番小さい屋敷は一・五坪で、これらは農家ではないと思える。逆に一番大きい屋敷は二六坪で、しかも、この人物は、村の中心地域に、八・七五坪の別屋敷を持ち、田一町五反三畝一一步、畑一町七反二畝二歩を持っている。耕地の多い地域に大きい屋敷があることから、中心地域にある別宅は、日常生活と、村役人としての事務所、更には一部商業活動にも利用していたと思われる。複数の屋敷持つものは、一三戸で、以下の通りである。

- ① 一四坪と六六坪。田一町九反九畝一三步、畑二町一反三畝一一步。
- 二軒の屋敷は同一地区。
- ② 二一坪と四六・七五坪。田九反六

畝一〇歩、畑一町一反五畝一七歩。別地域。

③ 三一・五坪と二七坪。田七反三畝一六歩、畑七反一一步。別地域。

④ 二二・五坪と一四坪。田三反一一步、畑六反四畝二六歩。同一地区(中心地区)。

⑤ 六六坪と三三・五坪。田四反三畝六歩、畑七反四畝二〇歩。別地域。

⑥ 三一・五坪と二八坪。田七反三畝一六歩、畑七反二七歩。別地域。

⑦ 一六・五坪と二二・五坪。田六反五畝一六歩、畑六反一畝一一步。別地域。

⑧ 三四坪と二〇坪。田五反八畝一三歩、畑七反四畝七歩。別地域。

⑨ 三八・二五坪と二二・五坪。田一町五反一歩、畑六反八畝一四歩。別地域。

⑩ 四〇坪と一七・五坪。田六反九畝六歩、畑八反一畝一一步。別地域。

以上のように、二戸の屋敷の坪数、田畑の面積、屋敷のある地域を分析すると、現在の地形からみて、農耕地帯と名田地名をもつ中心地域の二ヶ所に屋敷を持つ者が、②③⑤⑦などで、中心地で小農地を持つ④とともに、中心地域の家は、単に農耕用のものでなく、別の用途としての家のようにみえる。

この中心地区にある二二戸のうち、田が三反以下(三〜四畝のもの二戸)の者が一〇戸におよんでいる。このうち六戸は畑の方が多いのも、米作中心の農耕生活とは異なった生活をしていただのではないだろうか。

村の南と北の端(全々離れた場所)に家と土地を持つ⑥や⑨などは商品作物、山林労働、手工業など多様な生産活動をしていたのではないだろうか。

『水野記』によれば、諸色小物成として漆実役・真綿役・茶役・大工役・木挽役・桶屋役・鍛冶役・雉子運上など多様な課税がなされている。後に出てくる煙草・蒟蒻などについては表面には出ていないが、神石牛で有名な牛については、統計の数値はわからないが、農業経営の重要な一翼をになつていたことがうかがえる。役牛と厩肥の補給源としての牛の飼育は、かなりの富農層でないと無理だという記録は多いし、畜牛奨励のため「牛銀」を貸与した記録もある(広島藩)。

この度の検地帳の分析で一番、目についたのは、草山・町△反、村中・牛飼場々という除地があることだった。小は二〜三反から大は一町を超えるものまで、安田村で四七ヶ所ある。

明治以降畜産が収益事業の対象になつてから、自力で牛の持てない者を対象にして、資産家や博労が「牛小作」の制度をつくり、殆どの農家で牛を飼育していた。

然し、三〇〇年前に、九〇戸あまりの農家で、四七ヶ所の牛飼場を持ち、私達がかつてもつていた一〜二頭の「駄屋飼い」のイメージとは異なる飼育の方法がなされていたのか、畜牛の資金はどうしたのか、冬季の放牧は不可能だし、あの狭い屋敷で畜舎が建てられたのか、未解決の問題が多いのに驚かされる。

山国なので、山・藪に関する規制も多かったと思われるが、山年貢小前帳に八二筆の登録がある。実人員は六〇人ぐらいであろう。最高六反ぐらいで、銀四分六厘、最低二畝代で銀一厘がかなりいる。

藪の年貢は六八筆の登録で、人員は四三人である。この方は一人当りの銀の記録がない。一人当り反別は八畝を例外として、一畝前後である。年貢は、上藪で反当り八匁八分であり、下藪・下々藪で六〇%を超えるので、一人当りの銀は、せいぜい一〜二厘であろう。

こうした小額の銀を一人一人の農民が、どのように算段したか、今後の課題の一つと思える。

法然と備後

松岡 正

〃このところ絆衰しく明け暮れて〃
「ひたすらに南無阿弥陀仏 誕生寺」
これは六月に行なわれた津山バス例会の最後の見学地、法然ゆかりの誕生寺（久米郡久米南町）に参詣したとき、熊谷操子さん（上下町）が吟じられた句である。

六月初めとしては珍らしく暑い午後、広い本堂で、私達は住職の語る「法然上人の一代記」を厳肅な面ざしで拝聴していた。法話が〃土佐へ法然が流罪された〃というくだりになったとき、私の脳裏には「歎異抄」の〃法然の弟子、備後国へ流される〃という記録が浮かんで、〃備後国へ何処だろう〃という疑問が執拗に私を捕えた。

「歎異抄」は要約して言えば、浄土真宗の宗祖親鸞の語録であり、絶対他力を旨とする浄土真宗の教義の神髄として広く世に知られている。

「歎異抄」の付記に〃法然は土佐へ、親鸞は越後へ、浄聞房（注一）は備後国へ（以下略）流罪された〃記録を残している。法然と親鸞の足跡はよく判っているが、浄聞房は備

後国の何処へ流されたのか全く知られていない（注二）。

「備陽六郡志」の神嶋村（福山市西神島町、注三）の項に〃法然寺 法然上人讃州遠流のとき、此所に来り給ひ草庵を結び、しばし留りまいし所なり〃と記されている。堤勝義先生は〃神嶋村の伝承は法然ではなく、浄聞房ではなかったか〃と推定されている（注四）。事実、法然の諸伝記を見ると、承久二年（一一二〇七）法然は京都を離れ、神戸市兵庫一兵庫高砂市一兵庫御津町室津一香川県塩飽島一高松市（讃岐）にとどまり、土佐へ行かないうちに同年十二月に赦免され、翌年大阪市（地名は現在呼称にしている）に帰って備後に来たという足跡はない。私も堤先生の説に同意したい。

神嶋村の法然寺は法然ゆかりの地として弘治三年（一五五七）建立され、水野勝成が福山城を造ったとき、元和七年（一六二一）城下へ移し、安楽寺（福山市明治町）と改称したと「備陽六郡志」は伝えている。

ところで、「安芸国備後国知行帳」（一六一九）を見ると、神嶋村は鹿島村となつている。つまり、古くは鹿島と呼んでいた（注五）。

余談になるが、「万葉集」第十五卷三五九「月読の 光清み 神島の磯間の浦ゆ 舟出す我は」の神島は一般的に神嶋村（福山市西神島町）として伝えられているが、一説に岡山県笠岡市沖の神ノ島でないかという意見がある。私は以上の記録から見ても、歌にある〃神島〃は笠岡沖の神ノ島だと考えたい。

そして〃浄聞房は備後国鹿島へ流されたのだろうか〃と思う。
以上を、誕生寺での私の疑問への解答として、私の津山バス例会を終りとした。

注一 浄聞房は岩波文庫版では浄円房となつている。

注二 流罪の直接原因は、後鳥羽院の女房と法然の弟子安楽房（死罪）との風紀問題であった。

注三 奈良時代には海中にあった小島であり、元和（一六一五〜二四）の頃には、陸つづきであり、東側は海岸であった。

注四 「中世の備後の宗教・在地武士」 堤勝義著。

注五 福山城下に移された鹿島町は、寛永十七年（一六四〇）出火があり、神島町と改称された

と小林定市先生（水呑町）は説明されている。

香港・マカオの旅

比較文化論編

後藤 匡史

香港と云えば、江戸時代末期、アヘン戦争でイギリスの植民地にされた所である。また、マカオも一六世紀ポルトガルに占領された。

当時、日本も西欧列強が進出してきて、徳川幕府老中主座・阿部伊勢守正弘公は、ロシアのプチャーチン提督然り、アメリカのペルー提督然り、鎖国の扉を開かんとする内憂外患の時代を迎えていた。

今また、その日本も、この前の湾岸戦争、カンボジア内紛でのPKO活動でもめた際には、何の因果か、この時ご当地出身の宮沢喜一が内閣総理大臣であった。

正弘公は、身分が低くても若い江川太郎左衛門、勝海舟、川路聖謨などの幕臣を人材登用し、軍制改革・外交・海防に力を入れ、洋式訓練を導入した。後に日露戦争の時、連合艦隊旗艦・三笠の艦長室に阿部正弘公の肖像画が飾ってあったと聞く。この様な時に外から日本を見ると、いかに日本が治安がいいかわかる。日本だったら人権尊重で人が優先であるのに、香港では車優先である。そうは云っても、日本でもスピード

違反、ジュース・缶ビールの散乱と、国民の美意識が薄れてきた。

江戸時代の初め、西洋人が東海道を見て、西洋にもこれ程美しい街道はないと云わしめた。道にはチリ一つ落ちておらず、海を見れば、白砂青松、島影に白帆が浮かび、その美しさは眼に浮かぶ様である。

よく日本人の住む家はウサギ小屋の様であると皮肉を云った欧米人がいたが、しかしその昔、南蛮文化華やかりし頃、日本の家の構造を見て、合理的にできている、と云ったポルトガル人・スペイン人がいた。

狭い部屋も、障子や襖をはずすと広くなり、また、敷居一つでコロも付いてなく片手で開け閉め出来るところが何とも驚きであった。

遠くインド航路をインドのゴア、東南アジア、中国、朝鮮と見て来た当時の二大海洋国家、ポルトガルとスペイン(当時イスパニヤ)に、今まで見て来た民族の中で、これ程優秀な国民は見た事がないと云わしめた。

成る程、食事のマナー一つとっても、箸を持つ民族は中国、朝鮮があるが、茶碗を持った手を口に持つてくる民族は日本だけである。近頃、テレビ等でグルメ特集や、ホームドラマの食事の場面でナイフ・フォーク

クを使って食べるシーンがよくあるが、これなどは決して子供の為にならない。

箸を使用することは、指の運動になり、脳の細胞を刺激して血の巡りを良くする。だから欧米人に比べて体力的に劣っていても優秀なのはここに原因があると思われる。

それから、和服と云えば着物だが、この純日本調と思われる着物も、その下に着る襦袢は、ポルトガル語の *giuba* がジバン↓ジュバンと変化したし、また、男がはくズボンも元はフランス語で、*jeupon* がジュボン↓ズボンと変化したものである。しかし、どちらも下半身に着けるものとして同じ意味で、南蛮文化の名残りである。

今の日本人は欧州をヨーロッパとひとまとめにして云うが、四百年前の日本人はポルトガル人・スペイン人を南蛮人、オランダ人・イギリス人を紅毛人と呼んで区別していた。このあいだテレビを見ていたら、ニュース番組で女性キャスターが、欧米はレイディーファーストの先進国です、と云っていた。

しかし、それは違う。大体レイディーファーストと云う言葉自体怪しいのであって、何しろ西洋に魔女と云う言葉があるくらいだ

から、これは一八、九世紀のアメリカで生まれた言葉である。西部開拓時代、荒くれ男達が昼の憩いの時間に一杯と云う時に、給仕してもらうのに大事にしなければ西部の街に来てくれないからである。

また、日本と違って欧米では、夫人同伴でパーティーなどに出かけることが多く見られるが、あれはもし夫の友人にダンスを誘われた時、ホステスの代用を務めるためである。

さらに、家庭のやりくりなどで、今は振り込み制度が行きとどいているが、日本だったら給料は奥方が握っている。それに対し、欧米では、夫が権限を持っており、一週間、十日とその都度必要なだけ奥方にわたすのである。

一般に欧米で、建物は石造りで出ているので丈夫、日本は木造家屋であるので弱く見ると見る向きもあるが、そうではない。

一寸前、ニューヨークで奈良唐招提寺秘宝展があった。この時、鑑真和上像「脱乾漆像」が千二百年たった後でも腐食されずにいたことを驚異の眼で見えていたと報道されていた。

この度、世界文化遺産建造物に指定された奈良法隆寺、城郭建築の姫路城を見れば明らかである。千年たった木は切っても千年もつと云う。

第十二回 親と子の古墳巡り

網本 善光

①「古墳」との出会い

いきなり私事で恐縮ですが、「親と子の古墳めぐり」に参加するたびに、私が「古墳」を初めて見た時のことを思い出します。

実は、私が初めて「古墳」を見たのは大学一年の夏。大学で「考古学」という学問を志したのですが、諸先輩方から「岡山県出身なのに吉備の古墳を見たことがないの?」と、驚きを込めた助言(ノ)をいただいたからでした。

「古墳」に出会うために私が足を運んだのは、総社市の「吉備路風土記の丘」でしたが、そのときに、二つのことを実感しました。

その一つは、学校で教わる歴史はどうしても政治の中心部での出来事が主であり、したがって、自分の郷土の歴史について、知らないことが意外と多いのだということです。

そして、二つめが、とにかく実物を見るのが大事だ、ということですね。

私の感想がすべての人に共通とは言えないでしょうが、大きな石室に目を見張る子供や、ここにも古墳が

あったのかと初めて知ったような顔の親を見ると、「ああ、今回の古墳めぐりも成功だったな」と思っています。

②神辺の古墳をたずねて

さて、五月五日の子供の日、好天に恵まれた「第十二回 親と子の古墳めぐり」に、今年は一三〇名の参加がありました。

今回のコースは、神辺町の古墳を見学するもので、県内有数の規模の石室を持つ「迫山1号墳」をメインにすえたものでした。

朝、福山駅前をバスで出発。下御領バス停で、現地合流の参加者やNHKの取材班の方も加わって、まずは、第一の目的地「法童寺古墳」に向かいます。

この「法童寺古墳」、六世紀後半代の横穴式石室の古墳ですが、民家の裏山にひっそりと残っています。

さっそく、懐中電灯を使い、古墳の説明です。初めて古墳を見るといった風の子供たちは、気味の悪さ(ノ)と好奇心とをいっばいに、石室の中に入って行きます。

中に入って感じる、石室の意外な大きさや、古墳自体の印象について早くも親と子で話し合っている姿が見受けられます。

そこから西に歩いて「国分寺跡」

を目指します。群集墳を見てもらおうと思っただけに、加えた「国分寺裏山古墳群」でしたが、山道を上るのに一生懸命なものと、草木が思った以上に茂っていて、数基の古墳しか見ることができなかったのは残念でした。

「国分寺跡」での昼食の後、本日のメインである「迫山1号墳」に向かいます。急な山道を上った所に忽然とあらわれる、六世紀後半のこの古墳には、参加者の誰もがその石室の大きさに驚かされます。

同行いただいている篠原さんからの説明が始まりました。参加者が篠原さんを取り囲むようにして集まり、じつと説明を聞いています。

「どうしてこんなに大きな古墳がこの場所に?」、「どうやってこんなに大きな石室を作ったの?」などなど、質問も続出。やはり、実物ならではの迫力は、本や写真で見ると違ひ、子供の興味を強く呼び起こすようです。親子での古墳をバックにしての記念撮影も古墳めぐり恒例の光景でした。

神辺平野の北麓には、この他にも多くの古墳がありますが、それらも含めて、古代の神辺周辺についての議論が、古墳めぐりの第二部(養老の滝ノ)で花咲き、今回の古墳めぐりも無事成功に終わりました。担当された皆さん、大変お疲れ様でした。

第六回古墳講座

古墳研究会主催

いよいよ煮詰まってきた古墳講座。八月六日には、夏の暑さを吹き飛ばそう特別編として「騎馬民族は来なかった?」と題し、フリートークが行われました。

網本副部長は「来なかった!」組で、田口会長は「絶対に来た!」組。鋭い論戦が行われましたが、結局、真相は藪の中。この勝負は水入りとなりました。

次回の古墳講座は「吉備の古墳めぐり」と題して、備前・備中の重要古墳についてじっくり勉強します。初めての方も百円玉を握って集合しましょう。

日時 九月三日(土)午後七時。

以後も毎月第一土曜日に開催。

場所 中央公民館和室

講師 山口哲晶・網本善光さん

(古墳研究会部会長・副部会長)

費用 資料代実費(百円)

水無月の旅

岡本 貞子

新緑のさわやかな六月五日、水無月の津山を味わう旅へとバスに乗った。講師は碩学且つ法律家の立石先生。しかも先生出藍の地である津山の大庄屋・立石家の訪問には、心ときめき、大きな楽しみの一つであった。

それより先、さくらの見事な作樂神社を探訪する。花の四月の神域はさぞ美しい情景であろうと想像する。続いて児島高德の故事。先生ははつきり、これは時流に乗った作り話だと、ご説明になった。歴史に対する深い造詣がなければ、容易に明言出来ない事だと、改めて先生を尊敬する。

やがて立石家。広々とした門外の畑、門の内側につしらえた長押の檜、門内奥行のある庭園、格式のある屋敷の佇まい、伝統のある家風は、幾世代にも亘って多彩な人物を輩出するに足る土壌が、十二分に培われていたのだとひとり納得した。特に瓦を繋ぐ柱の金具の立派さに眼を見張った。全く芸術的であって家人の瓦に対する深い愛情と、大庄屋として、土豪として、いぎ鎌倉の時の心意気

も伺い知れるものであった。

午後四時、誕生寺着、広い境内を散策して、苔むした石の台座に、大きな石碑があるのを見つけた。表に、謡曲の碑とあるではないか。急いで裏側に廻って碑文を読もうとしたが、漢文でおまけに苔に覆われていて、わずかに漆間という文字だけ判読できた。謡曲は未熟乍ら好きなので、帰って数日後、お手紙を誕生寺へ差上げて、石碑の由来をおたずねした。十日余りして執事様から毛筆で丁寧なお返事が届いた。それには、今のご住職のおじい様にあたる徳定和上が（一八五九年生れ）建立

なさった碑で、和上は書道、詩作、謡曲などを嗜まれる多彩な文化人であったと記されていた。一九四四年（昭和一九）七六歳で遷化されるまで、同寺の住職として、寺域、地域、社会の為大変な努力を重ねられたとある。書はかな書きの大家で、松雨と号され、浄土宗の松雨とその名が高かった由、詩作も、吹雪の敲、弁の内侍、金剛石、の琵琶歌、作詩作曲の浄瑠璃、法然上人恵の月影は門下竹本津太夫を感動させて、大正一五年、文学座で歳末興行が上演され、大入り満員の成果で、市井の人を感動させたとの事。謡曲は、法然上人謡曲五冊など大作を遺されている。

悲しい事に、終戦の混乱の時、資料が散逸して、これ以上は不明ですと書かれてあった。

誕生寺を訪問して、謡曲の故郷に出会ったような思いを味わっている。立石先生のお導きで、みのり多い旅が出来た事を本当に有難く思う。いつまでもお元気で、社会のご指導を遊ばされますよう、切にお祈り申し上げている。

HOT NEWS

『びんごむかしばなし』

発刊!

購入希望者は事務局まで

福山地方初の生活文化情報誌月刊『びんご』（田口会長が毎月「備後散策」を、平田さんがショートノベルを連載中）を発行している備後出版情報センターから注目の本が上梓されました。『びんごむかしばなし』（定価11300円）です。

備後地方の昔話を丹念に取材したもので、今回は全五巻のうち第一巻。一般書店にもありますが、当会でもこの本を扱うことになりました。

売り上げの一部は会の活動資金に当てられます。講座等で販売しますのでご協力をお願いします。

中世を読む 第七回 『備後古城記を読む』

毎回、約20名の会員が参加する備陽史探訪の会で最大・最強の学習会です。参加者各自の発表の場がありますからやりがいがあります。中世の備後の武将と山城に興味のある方はぜひご参加下さい。

日時 九月十七日（土）午後七時。

以後も毎月第三土曜日に開催。

場所 中央公民館和室

座長 出内博都城郭部会部会長

費用 千円

（既にご購入の方は不要です。テキスト11原文コピー）

会報六二号の原稿募集

『備陽史探訪』六二号（一月末発行予定）の原稿を募集します。

歴史論文、短歌、俳句、例会参加報告、紀行文など内容は問いません。

本年最後の会報になりますので、充実したものになりたいと思います。

力作を事務局までお寄せ下さい。

字数は「氏名とタイトル」は別で、本文を「タテ一六字×二〇行」以内で書いて下さい（厳守！）

原稿締切りは一〇月末日です。

古墳めぐりで

東小学校六年 藤平奈穂

五月五日、九時数分前、釣人の像の前へ着いた。わたしは、友達といっしょだったので、これから見る古墳について、喜びと期待がいりまじっていた。

それから数十分。バスに乗って、下御領まで行った。

さあ、古墳をめざして出発だ、と思う心とともに、足が歩きだした。最初は、上に登るのも、下におりるのも楽だったけど、だんだんあとの古墳になるほど、道らしい道がなく

なり、かぶれの木がたくさんあつたり、木の枝がたくさんあつたりして上に登ったり、下におりたりするの

が苦しくなってきた。さらに、下におりるとき、すべるのではないかと心配になつてきた。が、そのような心配は、必要なかつた。なぜなら

木がたくさんあつたので、すべりそうになれば、近くの木につかまっておればいからだ。

このようなことをくり返ししながら最後から二つ目の古墳の迫山古墳へたどりついた。

わたしは、この古墳を一番最初に見たとき、今までのより、はるかに

大きく、今までのとくらべると、三倍以上はあるだろうなと、思った。

わたしは、この大きな古墳に何とぐらいのおかんがはいるのだろうかと思つた。この古墳の中にはいった百数十人と、同じぐらいたらうかと思つた。

それともう一つ、昔の人は、古墳を作つたら、そこまでおまいりにくるのだろうか、そして、おまいりにくるのなら、この険しい山を登つてくるのだろうか、不思議になつてきた。こうして、この古墳をみていくと、さまざまな疑問がうかびあがつてくる。

こんな疑問をかかえながら、あつちへ行つたり、こつちに帰つてきたりして、いろんな所から古墳をみたりどこから見ても思うのが、やつぱり今までのとはちがつて、大きいなあどうやつてつくり、何日かかつたのだらうと思つた。

それに、たくさんの人々や、大きな石が必要だ。わたしは、よくこんなに大きな古墳がつくれたなあと感心した。それに、こんなに大きな古墳を作つて何かいい点があるのだから疑問に思つた。

わたしは、来年いけるのなら、この疑問を解いてみたい。

事務局日誌

五月五日(祝) 親と子の古墳巡り

の際、四名の方が入会する。

五月七日(土) 第二回古墳講座。

『日本の古墳文化―大開拓の時代』

参加七名。参加者が少ないので、

情宜の必要性を痛感。最新の学説

にショックを受ける。ああ、もつ

たいない!

五月二一日(土) 第三回「備後古城

記を読む」参加一四名。徐々に盛

り上がつてきた。

五月二八日(土) 第四回郷土史講座。

『悪党について』講師・出内博都

城郭部会長。参加二一名。

六月四日(土) 第三回古墳講座。

『古墳葬送儀礼の変遷―墳墓と葬

送』参加一四名。参加者倍増!

六月五日(日) バス例会「水無月の

津山を味わう旅」講師・立石定夫

先生。参加五三名。立石家住宅の

規模の大きさに驚愕。誕生寺では

格別のもてなし。立石先生に感謝。

六月二一日(土) 歴史民俗研究部会

の特別講座「ふるさとの小祠の祭

り」開催。講師・石井良枝さん。

参加三〇名。今年の歴史研は一味

違う。

六月一八日(土) 第四回「備後古城

記を読む」参加二〇名。参加者激

増。会場に入りきれず、急きよ別

会場に移る。読みの甘さを反省。

於市民会館会議室。

六月二五日(土)

第五回郷土史講座『古代の祭式と

須恵器』講師・山口哲晶古墳部会

長。参加二三名。

七月二日(土) 第四回古墳講座。

『東アジアの古墳文化』参加一六

名。定着してきた。

七月九日(土) 第六回郷土史講座。

『スサノヲと蘇民将来伝説』備後

三祇園と八坂神社との関係の研究。

講師・平田副部会長。参加三三名。

七月一六日(土) 第五回「備後古城

記を読む」参加一六名。

八月六日(土) 第五回古墳講座。

『騎馬民族は来なかつた!?』

参加一八名。激論/つかみあいの

喧嘩には……ならない。ならない。

八月七日(日) 歴史シンポジウム

『応仁の乱』開催。参加三〇名。

パネラー田口義之会長、出内博都

部会長、杉原道彦副部会長、小林

定市さん。三時間半が短く感じら

れた。於市民会館会議室。

五時半から灼熱のサントークビヤ

ガーデンで慰労会。参加一八名。

暑いからビールはうまい!

★とくに会場を示していないものは

すべて中央公民館で行つた。

俳句

赤松 雅子

親と子の 古墳めぐりや 山笑う

石列や これもお墓か 花茨

歩を止めむ 鶯の鳴く 宮の跡

山の道 酸葉 虎杖 石仏

追山に 古墳かこむや 子供の日

第一二回親と子の古墳めぐりにて

平成六年五月五日

残暑お見舞い申し上げます

今年の夏は異常な暑さでした。寒
暖計の二五度以下はなくてもよいの
では、と思つたくらいです。暦の上
では、既に秋になりましたが、当分
の間、涼しくなりそうもありません。
時節がらくれぐれもお体にお気を
つけ下さい。

九月以降、様々な行事で皆様にお
会いできることを楽しみにしており
ます。

備陽史探訪の会会長

田口義之

特報 歴史研講座開講ノ

『古事記』を読む

歴史研主催の講座「古事記」を
読むーがいよいよ一〇月開講するこ
とになりました。

誰もが一度は完全に読んでみたい
「古事記」。しかし、なかなか最後
まで読み通すことが難しいのも「古
事記」です。今まで途中で挫折して
しまったあなたも、みんなで読めば
初志貫徹です。

歴史研講座「古事記」を読むー
の参加者を募集します。

もちろんどなたでも参加できま
す。初回はテキスト用意の関係があ
りますので、参加希望者は歴史研副
部会長の平田さん（〇八四九一二三
一三七八一 福山市明治町一―一〇）
までご連絡下さい。

〈実施要項〉

日程 一〇月八日（土）

時間 午後一時三〇分から
午後四時三〇分まで

以後、原則として毎月第二土曜日
の同じ時間帯に開催します。

場所 中央公民館視聴覚室

座長 神谷和孝名誉会長

副 平田憲彦副部長

テキスト代 未定

新入会員紹介

前回以後、多くの方が新しく入会
されましたので紹介します。ただ
し、既に会員名簿に掲載されている
方は省かせていただきました。

CONFIDENTIAL
備陽史探訪の会
個人情報が含まれるため掲載できません。

現在、会員数は一九二名です。

来年は創立一五周年です。今年中
に二〇〇名を越えて記念すべき年を
迎えたいと思います。皆様のお友達
お知り合いをぜひともお誘い下さる
ようお願い申し上げます。

秋の一泊旅行キャンセル待ち

まだチャンスはありますノ

一〇月九日（日）、一〇日（祝）
に実施される一泊旅行の受付は、定
員を越えたため、ひとまず締切りに
なりました。

しかし、四カ月前という早い時期
の受付のため、今後、ある程度キャ
ンセルが出るものと予想されます。
まだ申し込みされていない方も参加で
きるチャンスは残されています。現
に、既にキャンセル待ちの四人の方
が繰上げ参加になっています。

キャンセル待ちは今後も受け付け
ますので、ご希望の方は事務局まで
ご連絡下さい。

〈一泊旅行実施要項〉

日程 一〇月九日（日）と一〇日

（祝）一泊二日

費用 二五〇〇〇円（会員）

二六〇〇〇円（一般）

探訪地 荒神谷遺跡、上淀麿寺など。

★仮予約の方、旅行代金の払い込み
はもうお済みですか？

仮予約の方で、まだお済みでない
方は、必ず今月中お願ひします。ま
た、キャンセルされる場合は、でき
るだけ早く事務局までご連絡下さい。

第七回郷土史講座

『古事記』

成立の背景と意義

いま一番元氣印の歴史民俗研究部会。注目度ナンバーワンです。

一〇月八日スタートの歴史民俗研究部「古事記」を読む。そのオーブニングセレモニーとして企画しました。「ふるさとの小祠の祭り」「スサノヲと蘇民将来」に続き、ついに真打ちの登場です。

和銅五年(七一二)に成立した現存する最古の歴史書『古事記』三巻。

一時の「偽書説」も、昭和五四年に発見された安方侶の墓誌銘と序文とが一致する「万侶」の用字や、上代特殊仮名遣いの用字法の古さから現在では完全に否定されています。

上巻冒頭にある、あまりにも有名な太安万侶自身による序文。これには余すところなく「古事記」の成立事情が述べられています。

この周辺を神谷先生に深く掘り下げてお話しいただきます。

△実施要項▽

日程 九月二四日(土)

時間 午後一時三〇分

場所 中央公民館会議室

講師 神谷和孝名誉会長

資料代 一〇〇円程度

第八回郷土史講座

『わが家のルーツ調べ』

誰もが一度は遠い先祖を思い、ふるさとを訪ねる旅に心を躍らせるものです。

会報六〇号の「薙刀と私」に詳述されたとおり、講師の杉原さんは、ご自身のルーツに関わる劇的な古文書発見を経験されました(本当に感動的でしたね)。

そういった体験をもとに、具体的な先祖調べの方法や記録方法の実際をわかりやすく丁寧に解説していただきます。

これから、先祖調べをしてみようと考えていらっしゃる方はもちろんのこと、地域史に興味を持っていらっしゃる方など、多数のご参加をお待ちしています。

△実施要項▽

日程 一〇月二二日(土)

時間 午後一時三〇分

場所 中央公民館会議室

講師 杉原道彦さん

(城郭研究会副部会長)

資料代 一〇〇円程度

古墳研究会担当

秋の古墳巡り

コース決定!

晩秋の北房路を歩く

岡山県のほぼ中央、北房町は文字通り交通の要衝であり、山陽と山陰を結ぶ中継地点として長い間栄えてきました。

しかし、私たち備後人からは距離的にやや縁遠いという感じは否めません。ところが、備後と北房は意外な共通点があるのです。

北房町の大谷一号墳、定北古墳、定古墳は近年、発掘調査が行われ、終末期の古墳である事が確認され、六世紀〜七世紀に、この地に豊かな古墳文化が開花していた事を教えてくれました。

横口式石槨が象徴する終末期の古墳(高松塚古墳がその代表)は、畿内のほかは、備後などごく一部の地域で見られない珍しいものなのです。それが、北房と備後とにあるのです。二つの地域は実に不思議な糸で結ばれていたのです。

吉備北辺の地・北房、道の後・備後。はたして畿内勢力の吉備分断策として二つの地域は利用されたのでしょうか。長月に、あなたもこの謎を解き明かしに出かけませんか?

△実施要項▽
日程 十一月三日(日)
(雨天決行)

時間 午前七時四五分
集合場所 福山駅北口

(福山キャッスルホテル前)
参加費用 三七〇〇円(会員)
四〇〇〇円(一般)

受付開始 九月二二日(月)以後
その他 弁当・飲み物持参。山歩きのできる格好で参加のこと。

★今回も大人気が予想されますので、参加ご希望の方は早めのお申し込みをお勧めします。

編集後記

当初の予定より発送が遅れてしまったことをまずお詫びします。印刷所にお盆休みがあることをうっかりしていたのです。

そんな当たり前のことさえ疎忽とした頃は思い出せませんでした。今年の夏はそれほど強烈な暑さでした。早く秋になってくれ!今はただそれだけが編集者の願いです。

(H)

備陽史探訪の会事務局

☎七二〇-〇(五三)六一五七

福山市多治米町五一一九一八